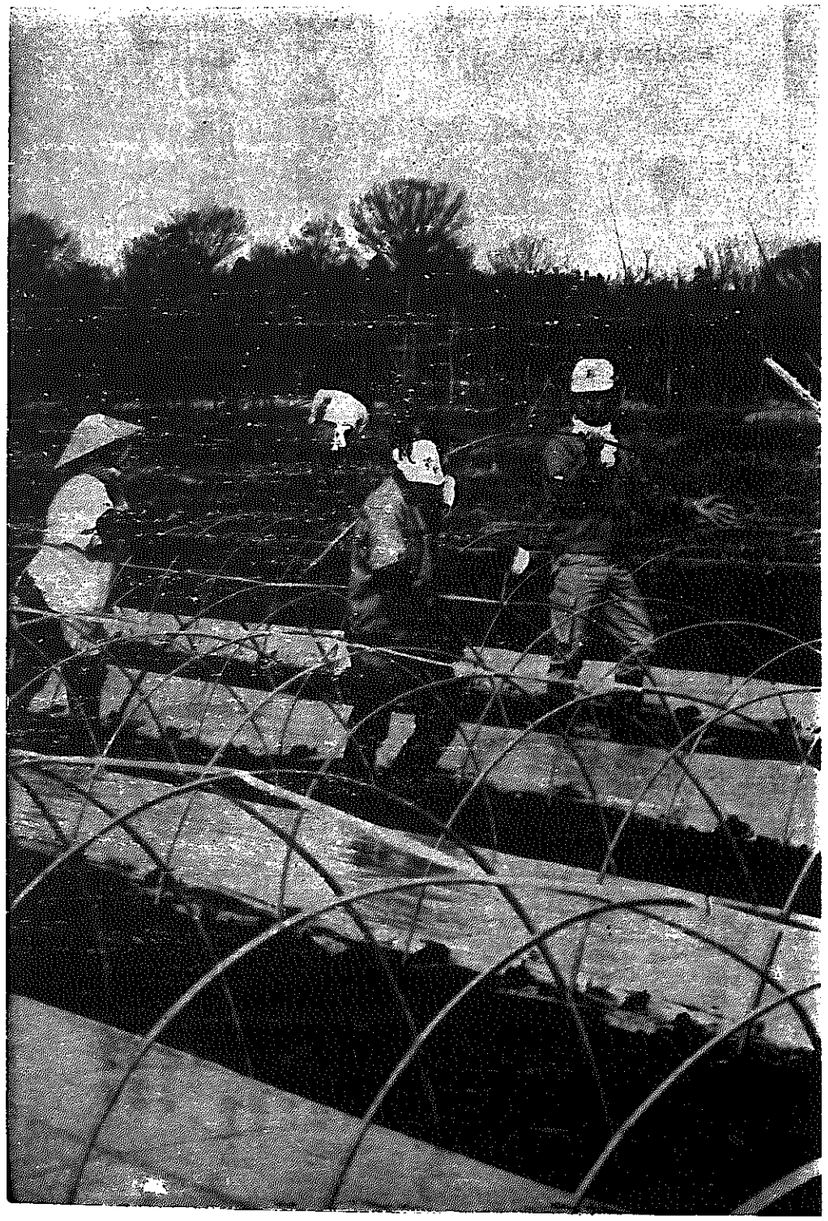
広報しろね

昭和51年　No. 236

◇人口の動き　4月1日現在　人口 32,737人　前月比 −55人（男 15,892人　女 16,845人）　世帯 7,105



豊作の願いをこめて

苗代づくり

一粒の種から多くの稲穂が、秋には豊かに実ります。

農業をとりまく情勢はきびしいが、種をまくそこから、すべてに打ちかつ芽が伸びるのです。

土にまみれ、いつくしみ育てた苦労が、収穫のよろこびに――『苗代づくり』は、そのスタートです。

私たちの生活の源である〝食糧〟を確保するためにも、種をまき続けなければなりません。

グループ登場

良寛研究会

その良寛の書、詩、和歌仏教を研究し、そこから学ぶ『良寛研究会』が、三月に誕生しました。

同会は、元高校教師で良寛和尚の研究者でもある橋馨さん（六〇＝根岸）が中心で、会員は十人です。

書、詩から人間像を追求

毎月一回開かれる定例研究会は、良寛和尚に魅了された人たちだけに、専門的な意見が続出――〝人間良寛〟の追求に懸命です。

会員の一人、鈴木さん（三一＝戸頭）は「良寛和尚の生き方に興味を感じ、それを仏教面から究明したい」などと話されています。

ともあれ会員の皆さんは、異口同音に「良寛和尚の人間像を追求すればするほど知らないことだらけで、その偉大さに驚きますネ」と話します。

道ばたの子らは、良寛の姿を見つけると手を打ってよろこんだ。彼もまた心からうれしく、これにこたえて遊びほうけたという

純粋むくな良寛には、子らが何よりの友であり、おとなとまったく平等に子どもたちの人格を認めたことでは、古往今来〝良寛〟ほどの人は、まれだったともいわれます。

市民文芸

〈川柳〉　白根川柳文芸会

三味の音に親父（おやじ）うきうき唄とり　山崎甲女

初化粧スタイル映す裏表　藤崎　実

旅に出る母うきうき髪を染め　長井徳市

職務よりストに精出す勤国労　庭山久作

開店の粗品へいつもの顔が居り　鶴巻靖男

入試合格うきうき走る電話口　後藤まさの

ロッキードエンマも驚く二枚舌　吉川　彰

入学の子より輪をかけ妻化粧　関根勝也

三つの孫睨（にら）みつければ笑み返す　大井義雄

テープ切る夢は五輪の空を翔（か）け　吉川末吉

修学旅行心うきうき待ちわびる　米野光雄

ランドセル背中にうきうき一年生　成出吉子

卒業も意気あがらぬ就職難　千代沢昭広

敬称が外れると税務署腰を上げ　中村尚治

ふるさと探訪

白根のおいたち

（13）

享保二十年来（一七三五）の悲願であった〝大河津分水〟の工事が明治五年（一八七二）三月から始まった。

しかし、工事は難航近くの村々からの就役者は十万人を数え、その過重の夫役によって不隠な情勢がかもしだされ、世にいう『悌輔騒動』がおこる。

四月三日、月岡にいた会津浪人渡辺悌輔は総勢数百人の一揆を率い『分水工事中止ほか三項』をとなえ、三条にはいり、七日午後六時ころ白根町にいたった。

この時の悌輔は、真槍をひっさげ、白地の中央に〝天照皇〟〝徳川恢復〟〝朝敵奸賊征伐〟と大書きした旗を先頭に、白衣を着て長刀を横たえていた〔写真〕。

悌輔たちは、須藤与一郎宅を宿となし、伊勢神宮領と書いた看板をかかげた。

翌八日のあけがた、付近から集めた徒、およそ千人を二隊に分け、中の口川をはさんで略奪殺傷をかさねながら新潟へ向ったが県は、新発田の鎮台兵二百の出動を要請――このため一揆は、平島で官兵の猛射撃を浴び壊滅状態となり、ほとんどが帰村した。

悌輔も会津へ逃亡する途中、新飯田で捕えられ同年九月に斬首された。

この騒動は、過重な夫役と重税、それに悪性のインフレで農民の七割を数える小作人の極度の生活苦が、その要因といわれ、これを機に分水工事は中止された。その後、分水の再工事と完成を願った田沢与一郎・実入の父子をはじめ有志が、そのために生涯をささげたことはあまりにも有名である。